ヨハネによる福音書 4章31～38節

今月の聖書の箇所は、前々回の部分、すなわち イエスの内に尋常の人間にはないものを感じ取ったサマリアの女性が町に行き、町の人々を連れて再びイエスのもとに戻ってくる、その間(かん)のイエスと弟子たちとのやり取りを記した箇所です。31 節の「その間(あいだ)に」とは、この間(かん)のことを指しています。

ここで、弟子たちはイエスに、町で買ってきた食べ物を勧めます。

弟子たち：「ラビ、食事をどうぞ」(31)
イエス：「わたしにはあなたがたの知らない食べ物がある」(32)
弟子たち：「だれかが食べ物を持って来たのだろうか」(33)

・「ラビ」(31) とはユダヤ教の呼称で、「先生」との意です。日本でも、ユダヤ教の会堂ではそのままの呼び方で用いられています。

・皆、朝から歩きづめで、時間はすでに昼過ぎ。誰もが腹ぺこです。弟子たちが食事を勧めるのも当然と言えるでしょう。

・とはいうものの、両者の会話はどこか、噛(か)み合(あ)っていないように感じられます。

・だとしたら、どこがどうずれているのか。そして、その原因はどこにあるのでしょうか。

・イエスの語られるメッセージは、そうしたずれたところにこそ そのポイントが隠されていることが少なくありません。その意味で、ズレの内容を知ることが大切になるでしょう。

「わたしの食べ物とは、
わたしをお遣わしになった方の御心(みこころ)を行い、その業(わざ)を成し遂げることである」(34)

・イエスの言われる食べ物がどんなものなのか、どうやら、弟子たちには想いが及ばないようです。

・そこで、イエスがそれを説明して言われたのがこの言葉です。

・イエスは明らかに、弟子たちの手にある食べ物とは違う何かで満たされています。ならば、それはいったい 何なのか、ということです。

・それは、と私たちは半ば反射的に、慣れ親しんだ一般的な事柄を考えるかもしれません。父なる神との交わりとか、そのための静思の時・祈りの時とかいうふうに。けれども、事はいつもそうであるように、ここでもまた、文脈の中で・文脈に添ってそれを読み解くことが重要ではないでしょうか。

・実際、イエスは、「わたしの食べ物」とは・・・の「御心を行い」・・・の「業を成し遂げる」ことである、と言っておられます。やはり、一般的・抽象的なことではなく、何事か もっと具体的なことを行なうことのようです。

・前後の文脈全体からして、それははたして、いかなることを行ない、いかなることを成し遂げるこ

となのか。イエスの目の前で起こった、また引き続き繰り広げられている一連の出来事をなぞりながら考えると、そこからどんなことが見えてくるでしょうか。

イエス：「目を上げて畑を見るがよい。色づいて刈り入れを待っている」(35)
弟子たち：「刈り入れまで まだ四か月もある」(35)

・イエスはその食べ物を御存じで、それを実際に食し、そして満たされた。それで、「目を上げて畑を見るがよい。色づいて刈り入れを待っている」と言われたのでしょう。
・それはそもそも、「刈り入れまで まだ四か月もある」との言葉に対するものでした。当時、格言として言われていた言葉です。
・パレスチナでは食用に小麦を植えますが、種を蒔(ま)き終えてから刈り入れを始めるまで、約 4 カ月間 待たなければなりません。そこから生まれた格言で、曰(いわ)く、「世の中には、急(せ)いてもどうにもならぬことがあるもんだ」との意です。
・サマリアに赴く前、弟子たちはおそらく、この格言に倣って、イエスになにがしかの意見をしていたのではないでしょうか。それはいったい、どんなものだったと思われるでしょうか。
・それに対し、しかし、イエスは言われたのでした。「そんなことはない。目を上げて畑を見るがよい。色づいて刈り入れを待っている」
・一同のいたサマリアのシカルは、パレスチナ随一の穀倉地帯の中心に位置していました。
　しかも、聖書の記述からして、季節は刈り入れ時(どき)の 5、6 月ごろと考えられます。2 章のいわゆる宮清めの事件（2：13～22）が過越祭(すぎこしさい)の直前（同 13 参照)、すなわち 3 月下旬ごろのことであり、その後 幾つかの出来事を経て この時に至っているからです。
　季節は、麦の刈り入れ時。目の前には、色づいた畑が広がっています。
・これを指差して言われたイエスの言葉、「目を上げて 畑を見るがよい。色づいて・・・」の深意は、すなわちその信仰的意味合いははたして、いかなるものなのでしょうか。
・しかも、ここには一つ 変わった表現が見られ、そこにまた、眼前の光景とそのメッセージを暗示するものがあるようにも感じられます。
・それは、「(畑が) 色づいて」とある その表現に関係しています。なぜなら、元のギリシア語では"λευκαί（<λευκή）" という語が用いられているからです。これは「白い」という意味の形容詞で、それが叙述的に「白くなって（いる)」というふうに使われています。
・ですが、麦畑が収穫の時を迎え、その穂に実がたわわに実っているのを見て、私たちは普通、畑が白くなっている、とはまず言わないでしょう。そのような表現をする国は見当たらない、と聖書学者も語っています。
・そのため、なんとか辻褄(つじつま)が通るようにと、訳出に工夫がなされています。例えば、
　邦訳聖書では
　－新共同訳：「色づいて」
　－口語訳：「色づいて」

－文語訳：「黄(きば)みて」

英訳聖書では

－NRSV、NIV、TEV 他："ripe"（実などが熟した）

－NKJV、JB 他："white"（白くなって）

といったぐあいです。

ちなみに、いわゆる岩波訳は「白っぽくなって」としています。

・元のギリシア語はそもそもどうなのでしょう？ 調べてみると、そこには「光り輝く」といった意味合いがあり、それが「衣服」の類いに多く適用され、そして「（光沢を帯びて）白い」といった表現として用いられていたことが分かります。と同時に、実際には色調にも幅があり、白から灰色までの色合いがそこに含まれていたことも見て取れます。

・こうしたあれこれを思い巡らすとき、一つの可能性として、そこからどんな情景が膨らんでくるでしょうか。想像力を豊かにすると、思わぬ発見があるかもしれません。

「そこで、『一人が種を蒔(ま)き、別の人が刈り入れる』ということわざのとおりになる」（37）

・こうして、イエスが言われた言葉がこれでした。

・場面の文脈に照らし、イエス・サマリアの女性・町の人々・弟子たちの出来事として考えるとき、これは具体的にどういうことを意味しているか。

・そして、それははたして、私たち自身の経験とどこでどのように重なるのか。

・聖書の場面と私たちの経験とを結び合わせつつ考えてみてはどうでしょうか。

〔参考〕この節と次節（38）の結びの言葉とも関連し、福音書の編纂(へんさん)当時、ヨハネの教会にサマリア人からの改宗者が加わっていて、そのことが背景となって、ある人が種を蒔き 別の人が刈り入れる（37）とか、他の人々が労苦し 別の人たちがその実りにあずかる（38）とか言われているのだろうと推測する学者もいますが、定説とはなっていません。

「他の人々が労苦し、あなたがたはその労苦<u>の実り</u>に<u>あずかっている</u>」（38）

・ということで、この結びの言葉になるわけですが、実は ここで「あずかっている」と訳されている言葉は、原語のギリシア語（*εἰσελήλυθατε*（エイセれーりゅさテ）＜*εἰσέρχομαι*（エイセルこマイ））に忠実に訳すなら「入っている」というふうになります。

・英訳聖書の NRSV 等もそのようにして、ここを "… have entered into …" と訳出しています。

・この原意をもし そのままに採用するとしたら、結びの一節のニュアンスはどのようになるでしょうか。

・さらにも言うなら、「・・・の実り」という言葉も 実は、原文には記されていません。"*ὑμεῖς*（ヒューメイス） *εἰς*（エイス） *τὸν*（トン） *κόπον*（コポン） *αὐτῶν*（アウトーン） *εἰσελήλυθατε*（エイセれーりゅさテ）" というのが、「あなたがたは・・・」以下の言葉の全体です。

・上記の NRSV に従えば、 "you have entered into their labor" とだけになります。あなた方

は彼らの労苦の中へとすでに入っている、ということです。

・この箇所については 新共同訳のような理解が通常ですが、ここでもまた 一つの可能性として、「労苦の中へとすでに入っている」というような こうした読み方がもしもできるとしたら、どうでしょうか。結びの言葉の理解に、更なる膨らみが生まれはしないでしょうか。

「既に、<u>刈り入れる人</u>は<u>報酬</u>を受け、永遠の命に至る<u>実を集めている</u>」(35〜36)

・そして結局は、事はこの一点に向かうのだろうと思います。

・そのうえで、要は、

「刈り入れる人」とは、誰のことか？

「報酬」とは、どんなものか？

そして「実を集める」とは、何をどうすることなのか？

ということになるのではないでしょうか。

・これらを、1. サマリアの現場のこととして、2. イエス時代の宣教のこととして、3. 教会の歴史のこととして、そして 4. 私たちの現在のこととして考えると、それぞれ どのようになるのでしょうか。

・そこまで行って初めて、今月の出来事が私たち自身のそれになり始めるように思われます。